ICHTHY
Natural History of Fishes of Japan
EDITED AND PUBLISHED BY THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM
ISSN 2435-7715
ORIGINAL RESEARCH ARTICLE
https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/ichthy/articles.html
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ichthy/-char/ja

大阪湾南部から得られたマルコバンとオオニベ

石川智也[1]・松井彰子[2]・木村祐貴[1]

Author & Article Info

[1] 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター（岬町）
TI: IshikawaT@knsk-osaka.jp (corresponding author)
YK: KimuraY@knsk-osaka.jp
[2] 大阪市立自然史博物館（大阪市）
shom@omnh.jp

Received 16 October 2026
Revised 09 November 2026
Accepted 09 November 2026
Published 10 November 2026
DOI 10.34583/ichthy.73.0_20

Tomoya Ishikawa, Shoko Matsui and Yuki Kimura. 2026. *Trachinotus blochii* (Carangidae) and *Argyrosomus japonicus* (Sciaenidae) collected from southern Osaka Bay, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 73: 20–25.

Abstract

Single specimens of *Trachinotus blochii* (Lacepède, 1801) were collected from southern Osaka Bay, Japan, in 2006 and 2026, respectively, and a single specimen of *Argyrosomus japonicus* (Temminck and Schlegel, 1843) was collected there in 2026. No previous records of *T. blochii* from the Seto Inland Sea have been confirmed, therefore, the present specimens represent the first record of this species from the Seto Inland Sea. *Argyrosomus japonicus* has rarely been recorded from eastern Seto Inland Sea, the present specimen represents the second record of this species from Osaka Bay. The specimen of *A. japonicus* was further examined to determine its sex and to analyze its stomach contents and age.

大阪湾は瀬戸内海東部に位置し，北部は明石海峡，南部は紀淡海峡でのみ外部と接続する半閉鎖的な海域である．近年，暖水性魚種の大阪湾における初記録報告が続き，気候変動で来遊する魚種が変化している可能性が示唆されている（例えば，木村・松井，2022；岡田ほか，2025；境ほか，2026）．そのため，暖水性魚種の出現や，魚種ごとの分布についての情報蓄積が，気候変動に伴う魚類相の変遷の理解に重要である．

大阪湾で営まれている漁業の 1 つである定置網漁業は設置場所に来遊した海洋生物の進路を誘導し，漁獲する漁法である．その特性上，遊泳力がある魚種や大型魚を漁獲しやすく，魚類の出現を把握する際の漁法として活用されている（例えば吉田ほか，2025；吉村ほか，2025）．

2026 年 5 月 22 日にオオニベ *Argyrosomus japonicus* (Temminck and Schlegel, 1843)，6 月 1 日にマルコバン *Trachinotus blochii* (Lacepède, 1801) が大阪湾南部で操業されている小型定置網において，それぞれ 1 個体採集された．また，これら魚種の採集記録を調査する過程で，2006 年 8 月 30 日に大阪湾南部沿岸で採集されたマルコバン標本の存在を確認した．本報告では，両種の大阪湾における出現について初めて詳細に記述する．また，オオニベについては，胃内容物および耳石横断切片の観察により生態学的知見が得られたため，あわせて報告する．

材料と方法

計数・計測方法は，マルコバンについては岩槻ほか（2000）にしたがい，成魚はデジタルノギス，稚魚は実体顕微鏡と付属する計測ソフト（VHX-8000，キーエンス，大阪）を用いて 0.01 mm の精度で行った．計測値は小数点第 2 位の値を四捨五入した 0.1 mm 単位で記した．オオニベについては上城ほか（2016）にしたがい，ノギスを用いて全長と標準体長は 1 mm，その他の体各部は 0.1 mm の精度で行った．なお，オオニベは漁獲後すぐに断頭されたため，標準体長と全長については本来の値と計測値で若干の差異がある可能性があるが，可能な限り生鮮時の体型を復元して測定を行った．標本の作製と登録は本村（2009）にしたがった．標準体長（standard length）は体長または SL と表記した．本報告で使用した標本はきしわだ自然資料館（KSNHM-P）および大阪市立自然史博物館（OMNH-P）の魚類標本コレクションとして登録，保管されている．

オオニベについては解剖を行い，生殖腺の目視観察による雌雄判別と胃内容物の観察を行った．また，耳石を摘出し，片山ほか（2021）にしたがい耳石横断面の不透明帯の数をもとに年齢査定を行った．

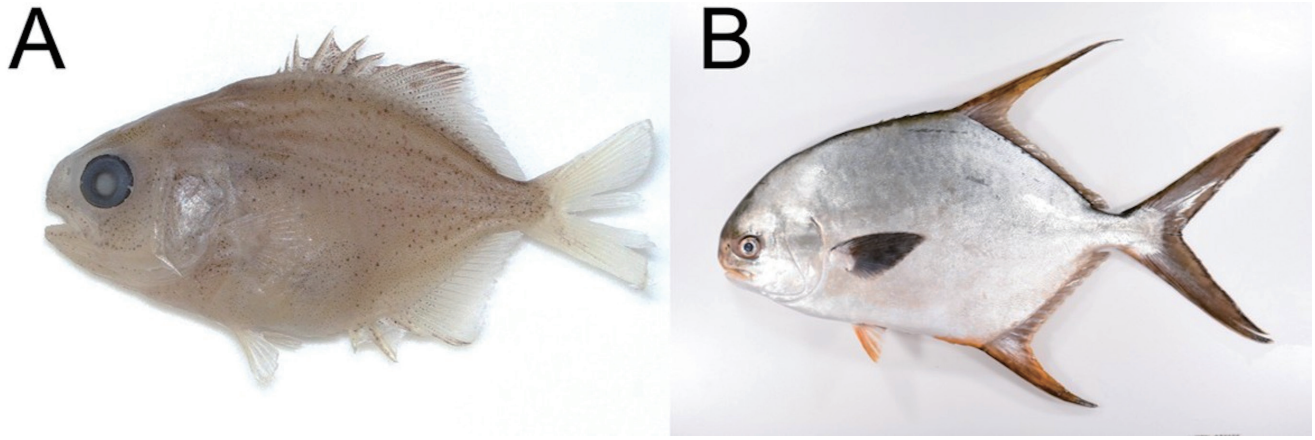


Fig. 1. Specimens of *Trachinotus blochii* from Osaka Bay. A: KSNHM-P 00710, 20.4 mm SL (preserved condition); B: OMNH-P 56106, 422.6 mm SL (fresh condition).

Trachinotus blochii (Lacepède, 1801)

マルコバン

(Fig. 1; Table 1)

標本　2 標本：KSNHM-P 00710，体長 20.4 mm，尾叉長 24.7 mm，大阪府泉南市岡田浦砂浜，地曳網，2006 年 8 月 30 日，花﨑勝司；OMNH-P 56106，体長 422.6 mm，尾叉長 459.2 mm, 大阪府泉南郡岬町沖, 水深 15 m, 小型定置網, 2026 年 6 月 1 日，西田光臣.

記載　体各部の尾叉長に対する割合を Table 1 に示す. KSNHM-P 00710：体は前後方向に長い卵型で強く側扁する. 体背縁は吻端から眼の上方にかけて著しく盛り上がり，そこから背鰭第 4 棘起部にかけて緩やかに上昇した後，尾柄部にかけて下降する．体腹縁は下顎先端から肛門にかけて緩やかに下降し，そこから尾柄部にかけて上昇する．尾柄部は体背縁，体腹縁ともに体軸と並行．胸鰭基底起部は鰓蓋後端よりも僅かに後方，胸鰭基底下端は下顎先端よりも僅かに下方にそれぞれ位置する．胸鰭後端は背鰭第 4 棘起部直下に達する．腹鰭起部は胸鰭基底下端よりも僅かに後方，腹鰭基底後端は背鰭第 1 棘起部よりも前方にそれぞれ位置する．たたんだ腹鰭の後端は背鰭第 4 棘起部直下に達する．背鰭第 1–3 棘は前上方を向く．背鰭第 1 棘は第 2 棘と鰭膜で連続しない．背鰭第 1 軟条起部は臀鰭第 2 棘基底直上に，背鰭基底後端は臀鰭基底後端直上にそれぞれ位置する．臀鰭棘は鰭膜で連続し，第 1 棘は肛門よりも僅かに後方に位置する．臀鰭第 1 軟条起部は背鰭第 3 軟条起部直下に位置する．背鰭と臀鰭の著しい伸長はみられない．尾鰭は浅く湾入する二叉型を呈する．肛門は正円形を呈する．鰓蓋と前鰓蓋骨の後縁はともに円滑，前鰓蓋骨の隅角部には棘があり，先端は鰓蓋後縁に僅かに達しない．口裂は小さく，上顎後端は瞳孔前縁直下に位置する．体に鱗はみられない．眼および瞳孔はともに円形．鼻孔は 2 対で前鼻孔と後鼻孔は互いに近接し，眼の前縁前方に位置する．前鼻孔および後鼻孔はともに背腹方向に細長く，スリット状．吻端は鈍く丸く，下顎先端直上に位置する．両顎歯は細かい絨毛状．側線は完全で，鰓蓋後端上方から始まり，臀鰭第 1 軟条起部直上にかけて緩やかに下降し，そこから直線的に尾鰭基底中央に至る.

OMNH-P 56106：体は前後方向に長い卵型で強く側扁する. 体背縁は吻端から眼の上方にかけて著しく盛り上がり，

Table 1. Counts and proportional measurements of specimens of *Trachinotus blochii*.

	KSNHM-P 00710	OMNH-P 56106
Fork length (standard length; mm)	24.7 (20.4)	459.2 (422.6)
Dorsal-fin rays	V-I, 18	V-I, 18
Anal-fin rays	II-I, 16	II-I, 16
Pectoral-fin rays	18	19
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5
Gill rakers	—	8+9
As % of fork length (of standard length)		
Body depth	43.9 (53.4)	48.1 (52.3)
Head length	29.6 (36.0)	23.2 (25.2)
Body width	21.8 (26.5)	13.9 (15.1)
Snout length	6.1 (7.5)	6.6 (7.2)
Orbit diameter	9.5 (11.5)	7.4 (8.0)
Interorbital width	15.0 (18.2)	9.8 (10.7)
Upper-jaw length	10.5 (12.8)	7.6 (8.3)
Caudal-peduncle depth	8.4 (10.2)	6.6 (7.2)
Caudal-peduncle length	7.3 (8.8)	4.9 (5.4)
Snout to dorsal fin	38.2 (46.4)	35.6 (38.7)
Snout to anal fin	50.9 (61.9)	43.9 (47.7)
Snout to pelvic fin	31.1 (37.7)	27.0 (29.3)
Length of dorsal-fin base	41.4 (50.3)	36.3 (39.4)
Length of anal-fin base	30.0 (36.4)	29.9 (32.5)
Caudal-fin length	21.7 (26.4)	39.4 (42.8)
Pelvic-fin spine length	6.6 (8.0)	10.6 (11.6)
First soft pelvic-fin ray length	11.0 (13.4)	9.2 (10.0)
Longest pectoral-fin ray length	17.3 (21.0)	18.5 (20.1)
Last dorsal-fin spine length	7.8 (9.5)	1.2 (1.3)
Second dorsal-fin lobe height	15.1 (18.3)	35.1 (38.1)
Third anal-fin spine length	8.1 (9.8)	28.6 (31.1)
Anal fin lobe height	13.4 (16.3)	24.5 (26.7)

そこから背鰭第 1 軟条起部にかけて緩やかに上昇した後，尾柄部にかけて直線状に下降する．体腹縁は下顎先端から臀鰭第 1 軟条起部にかけて緩やかに下降し，そこから尾柄部にかけては直線状に上昇する．尾柄部は体背縁，体腹縁ともに体軸と並行となる．胸鰭基底起部は鰓蓋後端よりも僅かに後方，胸鰭基底下端は吻端よりも僅かに下方にそれぞれ位置する．胸鰭後端は尖り，背鰭第 5 棘起部直下に達する．腹鰭起部は胸鰭基底後端よりも僅かに後方，腹鰭基底後端は背鰭第 1 棘起部よりも前方にそれぞれ位置する．たたんだ腹鰭の後端は背鰭第 2 棘起部直下に僅かに達しない．背鰭棘はそれぞれ鰭膜で連続しない．背鰭第 1 軟条起部は臀鰭第 1 遊離棘基底直上に，背鰭基底後端は臀鰭基底後端直上にそれぞれ位置する．臀鰭遊離棘は 2 本，第 1 遊離棘は肛門よりも僅かに後方に位置する．臀鰭第 1 軟条起部は背鰭第 3 軟条起部直下に位置する．背鰭と臀鰭は著しく伸長する．尾鰭は二叉型を呈し，深く湾入する．肛門は正円形を呈し，臀鰭遊離棘起部の前方に位置する．鰓蓋と前鰓蓋骨の後縁はともに円滑．口裂は小さく，上顎後端は瞳孔後縁直下に達しない．体は細かい円鱗に被われる．眼および瞳孔はともに円形．鼻孔は 2 対で前鼻孔と後鼻孔は互いに近接し，眼窩前縁の前方に位置する．前鼻孔および後鼻孔はともに背腹方向に細長く，スリット状．吻端は鈍く丸く，下顎よりも僅かに前方に突出する．両顎歯は細かい絨毛状．側線は完全で，鰓蓋後端上方から始まり，背鰭第 1 棘起部前方にかけて緩やかに上昇し，そこから波打ちながら下降し，尾鰭基底中央に至る．側線上に稜鱗はない．鱗は丸い敷石状を呈する．

色彩　KSNHM-P 00710（ホルマリン固定後）— 体は一様に淡褐色を呈し，背鰭，臀鰭，腹鰭，尾鰭は淡褐色半透明．胸鰭は無色透明．黒色色素は体の各部に点在し，頭部より後方は色素叢が比較的大型で，頭部や腹部では比較的細かい．背鰭は棘部鰭膜から第 6 軟条までにかけて明瞭に細かな黒色色素が分布するが，軟条部後部にかけて色素は徐々に減少する．臀鰭は棘条部と第 2 軟条までにかけて明瞭に細かな黒色色素が分布するが，軟条部後部にかけて色素は徐々に減少する．

OMNH-P 56106（生鮮時）— 体は一様に銀白色を呈し，体背面は暗い緑褐色を呈する．頭部前縁，両唇，鰓蓋後端，体側の胸鰭下部，臀鰭遊離棘起部周辺および尾鰭基底下端は黄色．背鰭と臀鰭の軟条部前部と尾鰭は黄色がかった褐色を呈し，背鰭と臀鰭の後部は黄色または褐色の半透明．胸鰭は暗褐色．腹鰭前部は黄色を呈し，後部は白色半透明．虹彩は銀色，瞳孔は青みがかった黒色をそれぞれ呈する．

分布　紅海，インド・西太平洋の熱帯・温帯域に広く分布している（瀬能，2013；武内，2025）．日本国内では琉球列島にみられることが多いものの，宮城県名取川，茨城県鹿島灘沿岸，千葉県（大原，御宿町），静岡県（下田市，浜名湖），三重県（志摩市，尾鷲市），高知県（種崎，以布利），宮崎県（門川，青島），および鹿児島県（内之浦湾，鹿児島湾，笠沙，甑島列島，屋久島，種子島）でも報告されている（小島，1985；瀬能，2013；鏑木，2016；畑・本村，2017; Motomura and Harazaki, 2017；村瀬ほか，2021; Hata et al., 2024；武内，2025）．本研究により，新たに瀬戸内海から記録された．

備考　KSNHM-P 00710 は体高が体長の 40% を超えること，背鰭第 1–3 棘が前上方を向くこと，背・臀鰭棘部の鰭膜上に黒色色素が分布することなどから小島（1985）が示した *Trachinotus blochii* 稚魚の標徴と一致したため，本種に同定された．日本国内でコバンアジ属の稚魚はコバンアジ *T. baillonii* (Lacepède, 1801) とマルコバンが確認されており，KSNHM-P 00710 は，吻が丸いこと，体高が高くなること，背鰭軟条数が 18 であることからコバンアジと区別される（小島，1985；瀬能，2013）．日本国内からは成魚のみが確認されているコガネマルコバン *T. mookalee* Cuvier, 1832 とは鰓耙数が 8+9（コガネマルコバンでは 6+15）である点で異なり（岩槻ほか，2000），ヨコヅナマルコバン *T. anak* Ogilby, 1909 とは鰓耙数が 8+9（ヨコヅナマルコバンでは 3+8），胸鰭軟条数が 19（18）である点で異なった（和田ほか，2019）．OMNH-P 56106 は，吻が丸いこと，体に黒点が無いこと，第 2 背鰭葉状部高が尾叉長の 35–60% であるなどの特徴が，瀬能（2013）が示した *T. blochii* 成魚の標徴と一致したため，コバンアジ属の中でも本種に同定された．

小島（1985）は，マルコバン稚魚の採集情報に基づき，コバンアジ属稚魚は初期生活史の一時期において砕波帯等の極沿岸域を成育場として利用していることを示唆した．KSNHM-P 00710 は砂浜における地曳網調査で採集されており，小島（1985）の仮説を支持した．

広島県海域を中心に瀬戸内海で確認された魚種をとりまとめた吉郷（2018）や，大阪湾を含む瀬戸内海で採集された魚類標本目録（波戸岡・花﨑，2017）でもマルコバンの記録はなく，KSNHM-P 00710 と OMNH-P 56106 が本種の瀬戸内海からの稚魚と成魚それぞれ初の記録である．分布の項に記載の通り，マルコバンは日本国内において主に琉球列島から記録されており，薩摩半島以北の出現は散発的，かつ日本海岸にはみられず出現報告は太平洋岸黒潮流路付近に偏っている．したがってマルコバンの九州以北における出現も黒潮による輸送の結果であると考えられる．和歌山県南部海域では魚類相が黒潮の影響を強く受けることが示唆されており（大西，2024），和歌山県に近い大阪湾における出現も，黒潮やその分枝流による偶発的なものであると考えられる．



Fig. 2. Fresh specimen of *Argyrosomus japonicus* from Osaka Bay (OMNH-P 56110, 1322 mm SL).

Argyrosomus japonicus (Temminck and Schlegel, 1843)
オオニベ
(Figs. 2, 3)

標本　OMNH-P 56110，体長 1322 mm，全長 1515 mm 大阪府泉南郡岬町沖，水深 15 m，小型定置網，2026 年 5 月 22 日，西田光臣.

記載　背鰭鰭条数 XI, 27；臀鰭鰭条数 II, 7；胸鰭軟条数 16；腹鰭鰭条数 I, 5 鰓耙数 6+9.

体各部の体長に対する割合（%）：体高 21.3；頭長 28.4；眼径 3.2；吻長 7.2；両眼間隔 6.0；第 1 背鰭前長 31.8；第 2 背鰭前長 49.8；臀鰭前長 76.8；胸鰭前長 32.2；腹鰭前長 36.9；背鰭基底長 56.5；背鰭棘部基底長 20.9；背鰭軟条部基底長 35.0；臀鰭基底長 7.6；臀鰭第 1 棘長 2.7；臀鰭第 2 棘長 5.7；胸鰭長 14.5；腹鰭長 15.3；尾柄長 18.5；尾柄高 7.4；鰓弁長 9.0.

体は側扁し，前後に長い．頭部は小さく，後頭部には骨質突起がない．頭部背縁と腹縁は直線的．吻は丸い．口は端位で，口裂は大きい．主上顎骨後端は瞳孔前縁直下に僅かに達しない．下顎にヒゲはない．下顎の感覚管孔は 2 対 4 個が確認されたものの，下顎吻端側が擦過状に損傷しており，総数を計数することができなかった．歯は 2 列をなし，内列歯は犬歯状で，外列歯は内列歯よりも細かい．鼻孔は眼窩前縁の前方に 2 対あり，前鼻孔は円形で，後鼻孔は比較的大きく開き，背腹方向に細長い楕円形．体の鱗は脱落しやすい．各鰭の鰭条と鰭膜に鱗はない．第 1 背鰭は第 3 棘が最長で，後方にかけて徐々に短くなる．背鰭基底は長く，体高の 2.7 倍．臀鰭の基底は短い．胸鰭軟条は全て不分枝．胸鰭後端は背鰭第 7 棘基部直下を僅かに越える．腹鰭軟条はすべて分枝する．尾鰭は二重湾入形．耳石（扁平石）は大きく，耳石長径は頭長の 8.4%．前後方向に細長く，卵形の楕円形（Fig. 3A, B）．背側縁辺は細かな凹凸がある．耳石内側面後方には溝（サルカス）があり，耳石の中央やや上部から後方に向かって湾曲する．耳石の外側面の中央部にはこぶ状突起があるため耳石は厚く，厚みが最大となる耳石中央部での厚みは長径の 38.8%.

色彩　生鮮時（Fig. 2）— 頭部と体の地色は銀白色で，吻端から尾鰭後端までの体背縁は黒色．腹側にかけて徐々に白みを帯びる．背鰭，臀鰭，腹鰭，胸鰭の棘，軟条および鰭膜は褐色を帯びた半透明の乳白色．尾鰭は濃褐色を呈する．

分布　南アフリカから日本，オーストラリアにかけての水深 150 m までの沿岸域に分布している（山田・柳下, 2013）．日本国内では宮城県から鹿児島県にかけての太平洋沿岸で漁獲が確認されている（西脇，2024）．瀬戸内海においては山口県や広島県沖で確認され（吉郷, 2018；木村, 2024），大阪湾においては，大阪市立自然史博物館に収蔵される神戸市産の標本（OMNH-P 45509）に基づく 1 例の記録に限られている（波戸岡・花﨑, 2017）．本研究により，新たに大阪府沿岸から記録された.

備考　山田・柳下（2013）が示した検索表に基づく種同定の過程で，本標本は下顎の感覚管孔数が不明瞭であったため検索条件との完全な一致が確認できる種同定は不可能であった．下顎の感覚管孔数を 3 対 6 個と仮定すると，尾鰭後縁が二重湾入形であること，胸鰭後端が背鰭棘条後端に達しないこと，背鰭と臀鰭が被鱗しないこと，体長が 50 cm を大きく超えることなどの特徴が山田・柳下（2013）が示したオオニベ *Argyrosomus japonicus* の標徴と一致する．下顎の感覚管孔が 5 個であると仮定すると，下顎の内列歯が外列歯よりも大きいこと，体に暗色縦帯，斜帯または顕著な斑紋がないことといった特徴が，シナオオニベ *Megalonibea fusca* Chu, Lo and Wu, 1963 と一致する．しかし，本標本は背鰭軟条数が 27 であることにより，背鰭軟条数が 21–22 であるシナオオニベと異なる（山田・柳下, 2013）．以上から，本研究ではこの標本をオオニベに同定した．大阪湾において，本種は 2015 年に神戸市沖で採集された体長 267.0 mm の個体が標本として登録されているのみであり（波戸岡・花﨑，2017；OMNH-P 45509），本標本が大阪湾で 2 例目となる記録である.

大阪湾において底生魚類相を整理した木村ほか（2025）

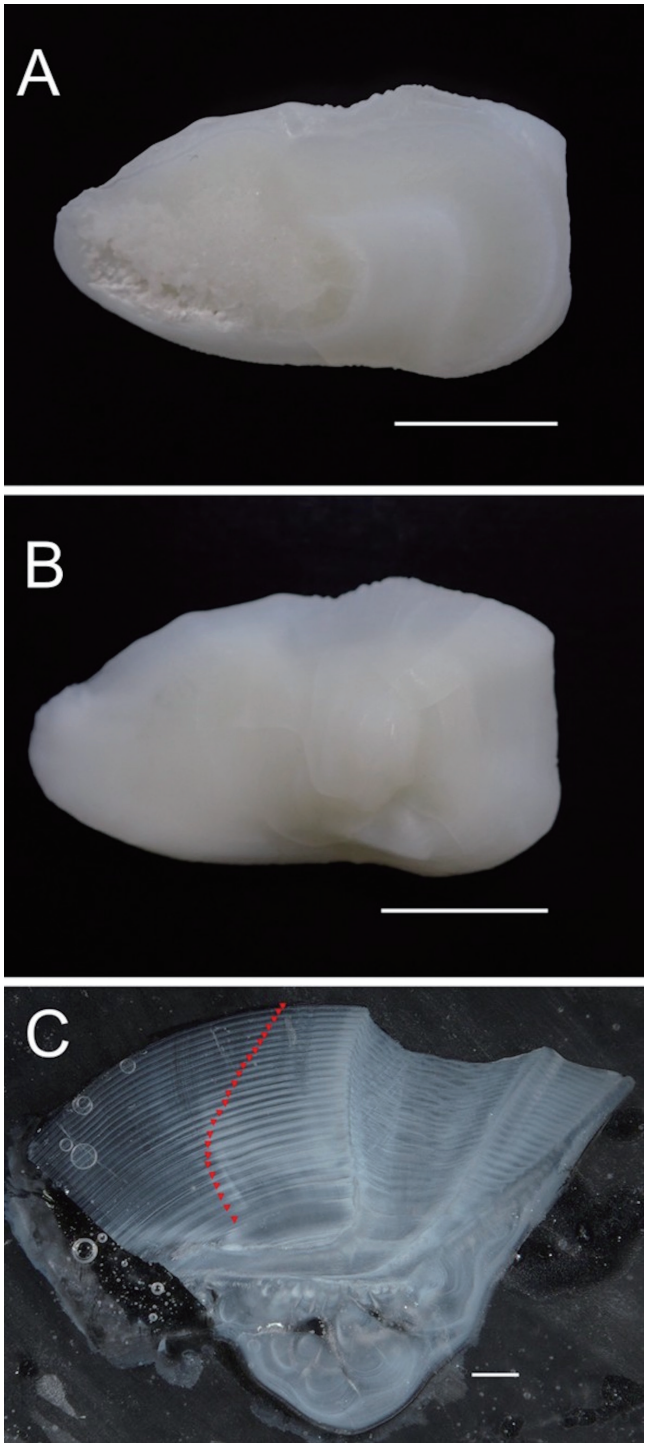


Fig. 3. Sagittal otolith of *Argyrosomus japonicus* (OMNH-P 56110, 1322 mm SL). A: inner side; B: outer side; C: transverse thin section. Scale bars indicate 10 mm (A, B) and 1 mm (C), respectively. Red downward-pointing triangles indicate the opaque zones counted.



Fig. 4. Preserved specimen of *Aetobatus narutobiei* (OMNH-P 56111, 306.0 mm in disc width) detected in the stomach contents of *Argyrosomus japonicus* (OMNH-P 56110).

や大阪府内漁業者から寄せられる漁獲情報でもオオニベの出現は確認されておらず，現時点では本種が大阪湾を定常的に利用しているとは考えにくい．西脇（2024）は日本の太平洋沿岸における本種の出現状況をまとめており，大阪湾に最も近い調査地点である徳島県と和歌山県では以前からみられ，まとまった漁獲があると報告している．そのため，記載標本は，これらの地域から紀淡海峡を介して偶発的に侵入したものである可能性が高いと考えられる．

本標本の胃内容物としてナルトビエイ *Aetobatus narutobiei* White, Yamaguchi, and Furumitsu, 2013 が 1 個体検出された（OMNH-P 56111，体盤幅 306.0 mm，重量 400.0 g，Fig. 4）．Taylor et al. (2006) はオーストラリア南東部においてオオニベの食性について研究を行い，全長 500 mm を超えると強い魚食性を示すことを明らかにしたが，本標本ほどの大型個体はサンプルとして供されていない．また，これまでに本種の胃から板鰓類が検出された記録はなく，本種の食性を解明するための新たな知見となる．

目視による生殖腺の観察によって本標本は雄と判別され，精巣に成熟の兆候は認められなかった．オオニベの繁殖期について，宮崎県日向灘では生殖腺重量指数が 2 月に最も高い値を示し，3 月以降は低下することが報告されている（片山ほか，2021）．大阪湾周辺海域における本種の産卵期は明らかになっていないものの，本標本も産卵期後に採集された個体である可能性が高い．

本標本の耳石横断切片を観察したところ，年輪数から 24 歳であると推定された（Fig. 3C）．オオニベの成熟全長と成熟年齢はそれぞれ 800 mm，4 歳と推定されており（片山ほか，2021），本標本は十分成熟が可能な個体であると考えられる．さらに，雄の極限体長（全長）について，宮崎県日向灘においては 995 mm（片山ほか，2021），南アフリカでは 1372 mm とされており（Griffiths and Hecht, 1995），本標本は既報の雄の極限体長に達している大型個体であった．

本研究で報告されたマルコバンとオオニベは分布の中心とされる海域は異なるものの，両種とも大阪湾における出現は稀である．これらの魚種が短期間のうちに同一の定

置網で採集されたことは，近年の水温上昇や黒潮の流路変化といった長期的な海況変化に加え，黒潮分枝流等の短期的な気象条件が作用することで紀伊水道・紀淡海峡から大阪湾に進入した可能性がある．今後，分布の中心がより南方とされる魚種が採集される条件についてさらなる情報収集を継続し，大阪湾のような黒潮の直接的な影響を受けにくい閉鎖性の高い海域において出現魚種が変化する要因の解明を進める必要がある．

謝　辞

本研究を行うにあたり，大阪府漁業協同組合連合会の岡本英明氏ならびに，きしわだ自然資料館の柏尾　翔氏には標本の収集にご尽力を賜った．Ichthy 編集委員の松本達也博士と匿名の査読者には，原稿の改訂にあたり有益なご指摘をいただいた．この場をお借りし，厚く御礼申し上げる．

引用文献

Griffiths, M. H. and T. Hecht. 1995. Age and growth of South African dusky kob *Argyrosomus japonicus* (Sciaenidae) based on otoliths. South African Journal of Marine Science, 16: 119–128.

Hata, H., K. Koeda, M. Aizawa, K. Sakamoto and R. Ueshima. 2024. List of specimens of the family Carangidae (Actinopterygii: Teleostei) deposited in the Department of Zoology, the University Museum, the University of Tokyo. The University Museum, the University of Tokyo Material Reports, 132: 107–147.

畑　晴陵・本村浩之．2017．鹿児島湾から得られたアジ科魚類マルコバンの記録．Nature of Kagoshima, 43: 127–130.

波戸岡清峰・花﨑勝司．2017．瀬戸内海産魚類標本目録．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 48 集．大阪市立自然史博物館, 大阪．204 pp.

岩槻幸雄・本村浩之・戸田　実・吉野哲夫・木村清志．2000．日本初記録のコガネマルコバン（新称）*Trachinotus mookalee*．魚類学雑誌，47: 135–138.

鏑木紘一．2016．種子島の釣魚図鑑．たましだ舎，西之表，158 pp.

片山知史・朱　玉立・中西健二・長野昌子．2021．宮崎県沿岸におけるオオニベの年齢と成長．日本水産学会誌，87: 117–122.

木村祐貴．2024．瀬戸内海における南方系魚類の漁獲状況．黒潮の資源海洋研究，25: 43–46.

木村祐貴・松井彰子．2022．大阪湾初記録のタチウオ科魚類テンジクタチ．Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 17: 16–19.

木村祐貴・鍋島靖信・大美博昭．2025．大阪湾における底生魚類群集構造の時空間的変化．水産海洋研究，89: 240–250.

小島純一．1985．コバンアジおよびマルコバンの稚魚期の形態と南日本沿岸域における出現．海洋生物環境研究所研究報告，85102: 1–32.

本村浩之．2009．魚類標本の作製と管理マニュアル．鹿児島大学総合研究博物館，鹿児島．70 pp.

Motomura, H. and S. Harazaki, 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1–183.

村瀬敦宣．2021．マルコバン, p 141．村瀬敦宣･緒方悠輝也･山﨑裕太･三木涼平・和田正昭・瀬能　宏（編）．ひむかの海の魚たち：新・門川の魚図鑑．宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド，延岡.

西脇土歩．2024．太平洋岸におけるオオニベの出現状況．黒潮の資源海洋研究，25: 13–18.

岡田智也・与那覇結衣・木村祐貴・國島大河．2025．大阪湾より得られた大阪府初記録のスミツキザメ（メジロザメ科）．Ichthy, Natural History of Fishes of Japan，52: 74–77.

大西　遼．2024．串本海中公園センターで記録された魚類．串本海中公園マリンパビリオン，15: 1–24.

境　茉耶・木下亮平・木村祐貴．2026．瀬戸内海初記録のムレハタタテダイ．Ichthy, Natural History of Fishes of Japan，66: 30–32.

瀬能　宏．2013．アジ科，pp. 878–899, 1991–1995．中坊徹次（編）日本産魚類検索　全種の同定．第 3 版．東海大学出版会，秦野.

武内　俊．2025．マルコバン，pp. 239．木村清志・笹木大地（編）美し国の魚たち　三重県の魚類図鑑．木村清志，伊勢.

Taylor, M. D., D. S. Fielder and I. M. Suthers. 2006. Spatial and ontogenetic variation in the diet of wild and stocked mulloway (*Argyrosomus japonicus*, Sciaenidae) in Australian estuaries. Estuaries and Coasts, 29: 785–793.

上城拓也・小枝圭太・本村浩之．2016．鹿児島県初記録のニベ科魚類クログチ．Nature of Kagoshima, 42: 265–268.

山田梅芳･柳下直己．2013．ニベ科, pp. 969–973, 2017．中坊徹次（編）日本産魚類検索　全種の同定．第 3 版．東海大学出版会，秦野.

吉田卓史・伊東正英・山田守彦・本村浩之．2025．薩摩半島西岸と南岸から得られた初記録の魚種 62 種．Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 53: 23–39.

吉村健司・大土直哉・青山　潤．2025．岩手県大槌湾・船越湾の定置網で得られた岩手県初記録 4 種を含む暖水性魚類 9 種の記録．Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 60: 36–40.

吉郷英範．2018．広島県から記録されている海産魚類目録．比和科学博物館研究報告，59: 127–193.

和田英敏・伊東正英・本村浩之．2019．鹿児島県から得られた日本初記録のアジ科魚類 *Trachinotus anak* ヨコヅナマルコバン（新称）．魚類学雑誌，doi: 10.11369/jji.19-009 (July 2019), 66: 181–186 (Nov. 2019).